

今年の受賞者をお知らせします

舟橋聖一 顕彰文学賞

舟橋聖一顕彰文学賞は、彦根市の名誉市民である作家・故舟橋聖一氏の功績をたたえ、ともに、広く青少年の文学奨励をはじめとした教育・文化の振興を図るために設けています。

18〜30歳の青年を対象とした第21回「青年文学賞」には全国から96編の応募があり、また、近畿各府県および滋賀県に隣接する各県の小・中・高校生を対象とした第24回「文学奨励賞」には、173編の応募がそれぞれありました。

選考の結果、今回の受賞作品が次のように決定され、授賞式が11月28日(土)に彦根ビューホテルで行われました。

問い合わせ先 市立図書館 ☎22-0649番 FAX26-0300番

文学奨励賞

小学生の部

第一席 『初めて見たホテル』〈作文〉
小島千明さん(若葉小学校4年)

第二席

『三〇〇メートルの富士登山』〈作文〉
麻野修平さん(稲枝北小学校6年)

第三席

『子ども狂言教室に参加して』
月野未彩さん(城西小学校5年)〈作文〉

中学生の部

第一席 『脳死』と「尊厳死」
河原早苗さん(真野中学校3年)〈作文〉

第二席

『大切な水のために』〈作文〉
久末 航さん(真野中学校3年)

第三席

『ネットゲームの時代に思ふこと』
林 高人さん(南中学校2年)〈作文〉

高校生の部

第一席 『仮面』〈創作〉
高萩麻弓さん
(彦根東高等学校2年)

第二席

『さよなら家族』
山中佳織さん
(奈良高等学校2年)〈創作〉

第三席

『天体望遠鏡』〈創作〉
板谷崇央さん
(彦根東高等学校1年)



最優秀賞

『虹待ち』

富士野督子さん
(埼玉県さいたま市在住)〈小説〉



佳作

『棚子』

漆原正雄さん
(鳥取県鳥取市在住)〈小説〉



第3回の受賞者をお知らせします

舟橋聖一文学賞

作品名 『商人』
あきんど

著者 ねじめ 正一さん
しょういち

舟橋聖一文学賞は、国宝・彦根城築城400年祭の開催を機に、彦根市の発展を図るために平成19年度に創設した賞です。文学の振興を通じて、市民が豊かな心を育み、香り高い文化を築くため、名誉市民である舟橋聖一の文学の世界に通じる優れた文芸作品に対し舟橋聖一文学賞を贈ります。

「舟橋聖一文学賞」は、これまでの「文学奨励賞」、「青年文学賞」のような公募式でなく、基準日を設け、その基準日より前の1年間に新しく単行本として刊行された優れた小説を対象としています。「舟橋聖一文学賞」が「文学奨励賞」、「青年文学賞」に応募する人の刺激となり、創作活動の目標、励みとなるように、また、広く地域文化の振興が図れるよう期待します。



ねじめ正一さん プロフィール

昭和23年東京生まれ。昭和56年詩集『ふ』で詩壇の芥川賞と呼ばれる『H氏賞』を受賞。平成元年、初めてがけた小説『高円寺純情商店街』で第101回直木賞受賞。平成20年、小説『荒地(あれち)の恋』で中央公論文芸賞受賞。大の野球好きで、『落合博満変人の研究』がある。絵本も『そらとぶこくばん』『きちようめんななまけも』など。

Brasiliaへようこそ!



第6回 アイデンティティーの道しるべ

年末の大掃除。大晦日とお正月に備えての準備。年越しそばやお雑煮。これらは、97歳になるブラジルの祖母が楽しみにしているものです。

言葉も生活習慣も分からないまま、海を越え、未知の世界へと旅立った先祖が私に残してくれたのは、アイデンティティー探しへの道しるべです。

日本人と同じ顔をしていながらEdnaというポルトガル語の名前をもち、ポルトガル語より先に日本語を習った私には、周りの人との違和感が子どものころからありました。クラスメートからJapa(日本人)とからかわれたこともあります。

行事に関しても日本のひな祭り、七夕、お正月とともにブラジルの伝統行事を味わい、『日本人』でも

『ブラジル人』でもない自分が腹立たしかったのを覚えています。

両国の文化の狭間で今だに寂しかったり、迷ったりすることもあります。日本の文化を知らずに育てられなくて良かったです。

違う文化に同時に触れることで、いろいろな素晴らしいものに出会い、物事に対する感受性が人一倍強いところが私にはあります。また、他国の文化を否定する前に文化の違いについてじっくり考えられる力を自然に得ることができたのも、家族から日本語や日本の文化を教わったからだと思えます。

それだけに、今、日本にいるブラジルの子どもたちがどんな思いで暮らしているのかと考えると何となくにはいられません。故郷へ帰ることのできない寂しさが大きく、両国の文化を吸収できるという希望はなかなか感じにくいことが想像されます。

できれば彦根に暮らしている外国籍住民、特に子どもたちには、日本のよき文化・風習を世界に広めていけるよう、希望をもってもらえるように国際交流員として努めたいと思えます。

【彦根市国際交流員 平田エジナ】